

後 上

「BOM シャンカール!!」。「絶対神シヴァよ! 知力を与え給え! 識別の力を!」と、インドの求道者は、このように祈って「マリファナ」を、深々と吸い込みます。この神に直接、知恵と力を求める、という信仰心を、近代合理主義は忘れてせ、瞑想を排斥し、私たちと神とを分断してしまいました。代って、万巻の書、学者先生、カリスマ、組織、ドグマ、神殿、寺院、テレビ、ついにコンピューターにと知恵を求めて、迷路に入り、知識の泥沼にはまり込み、自我意識はメチヤメチヤに混乱し、自己を信じられず、自分がどっち向いて歩いているのかも分らず、プルトニウムと聞いても感じず、たった数歩前しか見えないう近眼で、破局へ、破局へと突進している現代人。

「あゝ主よ! 私にはもうさっぱり何が何だか分かりません。あなたの正体も分らず、知ろうとも思いませんが、あなたが「いる、ということだけは信じます」と裸になった時、信仰の力は、自我から「近代、のガラクタを解放してくれるでしょう。神との回路の復活です。」「主よ、知恵と力を与え給え!」水は低きに流れて、精妙な識別力、即ち本物とニセ物を見分ける力を、育て、くれます。ニセ平和、ニセ自由、ニセ宗教、ニセ人物……。この世はお化けだらけだ」と、アメリカインディアン呪術師も言っています。

神の名や、信仰の形式、思考の戯れ方法、などは各人のお好み次第ですが、例えイワシの頭でも、確固たる信仰が無ければ、識別力は獲得出来ません。識別のない信仰は、狂信であり、権威主義即ち、奴隷の宗教です。南無釈迦牟尼大明神、これは戦う人民の宗教です。

さて年末のアブリ休漁期より二ヶ月間、畑は草ぼうぼう、家の修理も放ったらかして、ほら、集会だ、幹部会だ、名瀬だ、古仁屋だ、デモだ、と飛び回る他は、良い若い者が昼間から、家の中でゴロゴロしている状態が続き、働き者の島人から呆れられているだろうことは百も承知で、ミニコミ作りをやって来られたのも「これしかない。今迄のやり方ではダメなのだ。新しい関係性を革命して行かない限り、プルトニウムとの戦いには勝てない」という、誰よりも自己に対する確信、内なるシヴァ神に対する信仰の力です。

昨夜、最終編集会議を行い、無我利チームのベストナインの打順とポジションが決まりました。1番レフト、タカオ、2番セカンド、ギャー。3番センター、ヤツチヤン。4番ショート、ポン子。5番ギャツチャー、ダマリ。6番ファースト、ウルフ。7番サード、ミオ。8番ライト、エーキ。ラストがピッチャーのポン、というわけで、博文がヘッドコーチ、万葉が総監督というところでしょうか……。オマセの万葉、反抗期の宇摩、大胆不敵のひかり、笑顔の維摩と、厳しい監督陣の下で、新旧交代しのぎをけずる無我利チームの中であって、入団三ヶ月で早くもレギュラーの地位を不動のものにした大型新人タカオとエーキ。この新風に刺戟されて定住組も奮起、レギュラーへの地位を賭けたギャー、ヤツチヤンと共に、革命の何かを突きつける、発行1,000部の勝利心至。

今日2月12日、ダマリが自分の原稿だけ持って、新桜丸で東京直行。自主講座の同志

の協力を願って“折込み附録”の作図にかゝり、次便でウルフが皆の分を持って行きます。C.C.C.印刷と国分寺周辺の仲間たちの支援を、切に祈ります。ダマリとウルフ、東京周辺の仲間たちの間に、さ、やかな施風を巻き起こすでしょう。自己変革して行く奴と、いたずらに年を取って行く奴、時の流れはスリリングなものです。宗教革命でもあったヒッピームーヴメントが、何処に神を求め、どんな宗教を体現したか？ 総括はこの一頁です。

今宵は久しぶりに、孤りで、無人島の砦にいます。約二ヶ月ぶりの世俗からの解放です。

だからこそ、今宵この孤り身を、静かに坐らせ、瞑想に没入してみようと試みるのですが、草むらの虫、蛙共の交響曲と、さざ波の拍手に邪魔されたり、「後口上をどのように締めくくるか？」などという思念に惑わされ、今宵も又、サマディ（三昧）を断念しました。もし悟った結果が、世俗への無関心になるのなら、私の悟り、“個人的完成”は、たつぱり利子がつくまで、神様にお預けして、やはりこの世紀末のクライマックスを、傍観するだけでなく、みんなと一緒に出演して、悪魔共をやっつけたいものです。

宇検村漁協理事会を相手どった、私たちの“漁業権裁判”は、あさって15日、第二回公判ですが、悪党共の証人尋問はまだまだです。ところで裁判は有効か？ 漁場権放棄を賭けた本年度の組合員資格審査会（現勢力、正組合員賛成派79：反対派41、 $\frac{1}{3}$ を割ると放棄成立）は「裁判をかけられている我々理事が、それを無視して審査会をすることは、オカミの気分を損うのではあるまいか？」という反対派、山下理事の賢明な助言に、“裁判沙汰、を何よりも嫌う賛成派理事も同意”。「ここは一つ慎重に、本年度審査会を中止して、現状のまゝ凍結しておこう」ということになりました。何百万円も投資して、湾内実に十ヶ所もの定置網を張りめぐらし、「今年こそは補償金を！」と待っていた賛成派の二世漁民たちの中に絶望的な焦りが見えて来ました。今月末の漁協総会が楽しみで、来年度までには、組合員資格を獲得して、総会の席でしゃべりまくりたい精神的浮浪者、たち。

「オモシロクナツテ来マシタ、主ヨ、未ダ私ニハ、悟リヲ与エナイデ下サイ！」と、サマディを断念した私は、ランプを点もし、今、ペンを握っていますが、虫や蛙や波の音を忘れて、物を書くことに没頭出来るのも、これ信仰のお陰様であります。

例え短い瞑想であれ、シヴァ神に捧げた祈りは、それなりの御利益があるもので、つい先刻、暗闇の中で瞑想中、風も無いのに玄関の戸が、ガターンと倒れ、番犬のクムを怖えさせて、例のケンムンが来ていたのです。「オイデナスツタ、今宵こそは面つき合わせて、語り合つてみたいものだ」と、一瞬思ったのですが「イヤ待て、あんな奴とつき合っている暇など無いのだ」と思いとどまり、大声で「シヴァ シヴァ シヴァボーム マハーディヴァ シャンボ〜〜〜ム」と唱えて立上がり、玄関から外を見渡してみましたが案の定、さっさと退散したらしく、影しか残っていませんでした。呪文の意味するところは「神々の中の最高の神シヴァよ、悪鬼や、悪神共を追っ払い給え！」ということだと、インドの誰かさんから教わりました。これが本当に“不滅のマントラ、真言”なのかどうか？ 戦いの未来が実証してくれるでしょう。チャリ〜〜ンという、インド製のシンバル

も持ってます。ヤマハボーイコット運動も、武器としてこれ一つで戦いました。シヴァを最高神と信じることによって、権力者に忍び込んでいる悪鬼と、その追従者共に忍び込んでいる悪神共を退散させると同時に、最終的には呪い殺すのです。シヴァは百の名を持っていますと言われています。ラーマもクリシュナも、仏陀もキリストも、アラームエホバも、ブラフマンもアートマンも、空も色も、シヴァの百の名の一つだと。宗教戦争言うのも結局は政治的抗争ですよ。

ところで待ちに待った緊急事態も、今年は未だ望めそうもありません。反対派が一歩取ったというより、賛成派がドジを踏んだという感じです。南大島4ヶ町村の町村長、議長、漁協長たちは「今年こそ、東燃様のために何とか環境調査をして給もれ! でないと奄美はヤマトにフラれそうじゃ」と、県に泣きついたのですが、県の方も一度は予算まで組んで、赤恥をかかされているだけに、慎重のポーズ。となるとなあの事、焦りに焦った賛成派は「反対する者はもういません。私たちが責任持ちます」などというウソ八百の陳情をしたのです。すかさず郡民会議は、宇検村と瀬戸内町の反対派漁民の署名を県に突きつけ「そっちがその気なら、やる気満々の実力阻止」と公言したところ、県は本年度予算編成ギリギリで又しても断念。九月の補正予算でも先ず無理だろうというのが下馬評。

かくて、漁場権放棄も、環境容量調査も年内は安泰。激戦80年代に向けて今のうちに実力をつけておかねばなりません。本物の漁師、たくましい戦士を増やし、人民戦線の運動、団結を確固たるものにしておくことです。

山下水産のアブリ漁も、新しいやり方で再建することが決定しました。平田部落の伝統を、人民戦線に解放し、共有していただくために、広く株主を募り、冷凍冷蔵庫を設置し、無敵の生産共同体にするのです。枚挙多しと無我利道場の存亡を賭けて、私たちは資金面でも全面的に協力、参加いたします。近日中に株式の細目が決まり次第、読者の皆様にも御相談、御願ひするつもりです。よろしくどうぞ。たゞし、この戦いに敗北した場合は、配当はおろか、元金までが、いずれ地球もろ共、パアになってしまうのですから、それを承知で支援を願わねばなりません。保証人は、シヴァ神。如何でしょうか?

さて、シヴァの知力を得て、ペンの戦いの方は、奥里人創刊号のあと、昨夏、「分権独立運動情報」というミニコミの4号に、「ヒッピームーヴメント総括」という、400字詰64枚の力作を書きました。「枚浪と宗教」「コミュニケーション」「マリファナとLSD」「フリーセックス」「祭」という、ヒッピームーヴメントを特色づけたらつたテーマを、体験的に語ると同時に、日本の反体制運動の前衛であったカウンターカルチャーが、いかに無残に権力にからめ取られ、体制内同化しつつあるか、そしてその運動の革命的エキスを吸収した私が、どのように自己変革したかを、開示してみました。本誌ではその結果としての「奄美ナロードニキ」を紹介したわけですが、年末に「コミュニケーション主義ナロードニキ革命」を書き、年明けと同時に「奥里物語36話」を書いた後、息つく暇もなく、ナロードニキ革命の根本理念を「人民の宗教」と題して、前述「分権情報6号」に書きました。

ヒマラヤに小型原発放置 CIA

射能を保持し続けることから、雪崩に遭った時の容器の破損や今後長年にわたる雪にさらされることによる腐食でフルトニウム238が漏れ、ガンジス川を汚染する可能性があると指摘している。

【ニューヨーク十二日AP】「時事」当地の月刊誌「アウトサイダー」は十二日、米中央情報局（CIA）が一九六五年ヒマラヤ山脈に設置したといわれる原子力発電装置の放射線物質によりガンジス川が汚染される可能性があることを報じた。

同誌によると、CIAは対中国スパイ用監視ステーションをヒマラヤ山脈のナンダデビ峰（通称ブールマウンテン）に設立しようとしたが失敗、同峰にフルトニウム238を燃料とする原子力発電装置を置き去りにした。しかし、この装置はその後雪崩により埋没し、翌年回収しようとしたができなかったという。さらにその翌年の六

ガンジス川汚染の恐れ 米誌報道

同誌によると、CIAは対中国スパイ用監視ステーションをヒマ

七年、CIAはナンダデビ峰の隣の峰に、より小型の原子力発電装置により作動する対中国監視ステーションを設置することに成功したが、これは現在使われずに放置されたままになっている。

同誌は、ガンジス川の水を使うすべての人が危険にさらされるかもしれないと述べることも、こうした状況はこれまでインド政府に知られていないと付け加えている。

ところで、右の新聞記事を御覧下さい。

インド人民の生活と魂の聖河ガンジスにかけられた最大の呪い。それでもインドは、伝統の上に悟り切つて、沈黙しているのでしょうか？

ついに原爆まで持ってしまった神々と賢聖たちの国の史上最悪の墮落。これは西洋物質文明の「象徴的結晶」、であるプルトニウムによる、東洋精神文明に対する、最終的な宣戦布告です。

インドの哲学と宗教に、知力を求めた私に、「インドはどんな戦いをするか？ いかにして対プルトニウムの共斗路線を張るか？」は、大いなる興味、課題とするところです。

「人民の宗教」の中で、私は私たちの眼を改めて東洋に向けさせてくれたアメリカ、ヨーロッパのビートニック、ヒッピームーヴメントを総括し、彼らがいつの面にか反面教師、否定的模範に成り下ってしまったことを指摘しました。

ベトナム反戦平和運動として、ペンタゴンに対して輝かしい戦果を上げたこの白人の若者たちの運動が、何故かくも無残に体制内同化してしまったのか？ 白人の運動が究極的な革命にまで、決して過激先鋭化しないのはなぜか？

というテーマで「呪術、ドンファンの教え」というベストセラーを紹介し、西改合理主義が、アリミティーヴの教習の前で、コテンパンに敗退し、今や世界中の被圧迫民から、何よりもその人間性に於て、「ホワイトは指導者でありえない」ことが暴露されているにも関わらず、「自分らは何も分っちゃいないのだ」という無知を知らず、得々として「革命に関して、さへ、指導者面したがる愚鈍さ、東洋に知力を求めながら、一片のアライドさへ放棄しえないケチ臭さ、ドルの臭いが魂に浸透し、下層人民世界からボイコットされ、真正の宗教に決して触れることのない傲慢さ、それ故に「白人的なもの、は遠からず、地上から一掃されねばならない」という結論に達しました。そして、新しい世界の秩序を、東洋思想の源泉インドに求めて、7年前の私のインドの旅を語ることによって「近代、を総括してみました。「宗教は阿片だ」と言った性善説、信者マルクス、この楽天的、近視眼的理論による左翼革命のお粗末。政治、経済のレベルでは、今や決定的変革は不可能です。

新しい革命は、唯物無神論者たちの「無関心」である「心の奥底」にスポットを当て、本能の恐るべき力を解放し、その力に方向性を与えることによって、意識そのものを変革して行く宗教的戦いです。私はそれを仏陀やラマクリシュナの意志を受継ぎ、抑圧され

て来た者たちの解放の宗教、戦いの宗教を、巨人ヴィヴェーカーナンドの実践ヴェーダンタ哲学の中に学びました。「新しい宗教は教典にまとめられることも、体系づけたり、宗派を作ったりすることも、カリスマや神殿を拜むことでもなく、そいつは破局の危機をヒシヒシと感じ、自己も放棄して戦う人民の、お互いがお互いを尊敬し、信愛し合う日常生活の中に、さりげない物腰、優しい微笑、ちょっとした気配り、さわやかなユーモアなどという表現をとって、心から心へと直接伝播されて行くだろう。人民は何が宗教で、何処に源泉があるのかも気づかないで、真正の宗教を体現しつつあるのだ。無名の菩薩として、オースターの英雄として、逆境の地で、愛にのみ溶け合って、日一日と、自己を克服した者の不滅の勝利に向って歩み続ける人民。行く者よ、往く者よ、全き往く者よ、幸あれ!!」という祝福で、この56枚の労作を結びました。『奥里物語』の理念的バックボーンとして併読下されれば幸いです。

「殺せ! 怖れるな! 戦って敵を粉碎せよ!」最高のヒンズー聖典バカヴァット・ギーターの中で、主神クリシュナが説く、この戦いの宗教。非暴力主義者ガンディーの座右の書でもあった直接行動の哲学。その中の決め手であるこの「コロセ!」の一言をめぐって、『バインド』の哲人たちの、あるいは戦士たちの議論は集中しました。そして現在、その解釈は私たちに任ねられたのです。哲人にして戦士である私は考えます。「殺せ! 自らの内なるヤマトンチュウを、白人的なもの一切を!」よろしい、私はこの殺人を、誓って引き受けます。しかし原水爆によって、恐怖と支配欲に狂ってしまった権力者共を、私はガンディーのように、紳士と見なして戦うことは出来ません。騎士の時代は、大量殺人兵器の出現と共に終わったのです。権力奪回の勝利の暁には、武力を避けることは不可能かも知れません。全生類の名の下に、私自身の手を朱に染めなければならぬ時が、来るかも知れません。主神クリシュナは言います。「私心なく為された行為は、例え殺人であっても、罪の付着することはない」と。しかし、武力を持った強者より、素手の強者の方が、より完璧な勝利をものにするでしょう。旅人のマントを脱がすのは、風の暴力ではなく、太陽の愛なのです。「憎しみは、憎しみによって消え去ることはない。憎しみはたゞ愛によってのみ消え去る。これは永遠の真理である」と、偉大なる愛の人、仏陀の言われたこの言葉こそ、非暴力直接行動の根本理念であり、最もラディカルな革命精神だと思います。

核兵器を持った食肉類人猿の、狂った末裔たちと戦うには、彼らと同じ暴力をもってしては、勝負どころか全てがシヴァーです。霊長類としてあんまり芸の無い話です。ヒトの行動を操作している「頭脳」に、ある種の催眠術をかけ、原爆のボタンを押す手を不動金縛りにしてしまうような「知力」による戦い、この前代未聞の戦いこそが、進化の最先端を行く「意識」の戦いです。武力とはこの心理戦争の、いわばカムフラージュであって、武力をあてにしているようでは、弱肉強食の論理から一歩も出ていない事になります。断じて賢明であらねばなりません。例えば「シヴァ、シヴァ!」などと、真剣な顔をして言ってみたり、フザケてみたり。だって一切は「彼」がやっているのですから。**シヴァボーム!!!**

新石器40079年2月12日 枝手久島鈍 無我利屋ポン太